

月	三				
	(二十) (セウコク) (ミン)				
	二十四、ウグヒ ス	雜祭 菱形、四折切 抜ヲ含ム	二九、方角		
	二十五、つくし (韻文)	私ノ村 地ノ方角ノ觀 念ノ初歩導入 ヲ含ム	二十、ウグヒス	上下大 小日月	ヘイタイサン ヒカウキ ヒカウキ ヒカウキモヤウ アカイリンゴ
	二十六、汽車		三〇、草つみ		

新入園児を迎へる準備に就て

本號には、編輯部からのお願ひで、新入園児を迎へる準備に就て、廣く各地の誌友からの寄稿が集録されてゐる。いづれも豊かな實際經驗を基礎とされた貴い御意見である。一々傾聴すべきことに充ちてゐる。それに加へてといふのではないが、餘白を借りて、これも必要と思ふ準備の一つ二つを。

一、新しい心持で迎へること。これは何もしないといふばかりでなく、常々のことであるが、殊に、全く新しい心持で入園して来る幼児達の爲には、絶対に大切なことである。勿論幼児を扱ひなれてゐるといふことはいふことであるが、それは心の動き方、手の動き方がなれてゐることで、心持そのものが、なれつこになつてゐるのであつてはならない。如何に上手であり、巧妙であつても、一人々々の幼児に對する、眞に新鮮な心持がなくては、決して眞に新入園児の心持を迎へることは出来ない。その古びきつた厚い革のやうな、又すれつからした革のやうな心のはだは、最も新らしく、最もやはらかない新入園児の心のはだに、どんなにか、うす氣味悪くさへ感じられることであらう。

倉橋生

二、ひとり／＼を迎へること。新入園児といふ言葉が既に、あの多數を一括した言葉である。實は、そんなものはなく、迎へられるのはひとり／＼である。皆さんといふ言葉さへ生れて始めて聞く子が多いであらう。勿論、幼稚園といふものとしては、だん／＼と集團生活へ導いてゆくのであるけれども、四月早々、組を作つて入り来るのではない。ひとり／＼で来る心を先づ受取つて呉れないで、たばにして受取られては、それこそ面くらふであらう。なまけなくもなるであらう。うらめしくもなるであらう。腹立たしくもなるであらう。但しこゝでひとり／＼をといつてゐるのは、個性を重んじてといつた心理學的な注意に止まらない。それよりも、もう一層眞實に、太郎は太郎として、花子は花子としての、こつちの心持ちをしつかり持つて迎へることである。

幼稚園の目的は、幼児を迎へてばかりあるものではなく、況んや、その心に迎向したりしてゐるところではない。が、先方から新らしく来る日、先づ眞に迎へてやることを心がけやう。